

染色体数  $2n=16$  の *A. ramosa* と  $2n=32$  の *A. amurensis*, 及び  $2n=16$  の *A. amurensis* (= *A. amurensis* var. *puberula*) と  $2n=32$  の *A. amurensis* との両交雑の結果生じた雑種は、染色体数がいずれも  $2n=24$  である。

交雑結果と園芸品種の染色体数及び外部形態に基づくと、供試した24種類の品種は次の3群に分けられる。

(1) 染色体数  $2n=16$  の品種。一茎に多数花をつける。果実は球形、萼片は倒卵形で、緑〜黒緑色を呈する。花卉は明らかに萼片より長い。寿・日の本紅・日の出紅・玉手箱・三段咲・七福神が属する。これらは *A. ramosa* Franch. に由来すると考えられる。

(2) 染色体数  $2n=32$  の品種。通常一茎に一花をつける。果実は楕円形、萼片は紫〜濃紫色を呈する。花卉は萼片より長いまたは短い。雅楽・変化・弁天・小菊・金采・爪折笠・御所・秩父紅・佐渡が属する。これらは  $2n=32$  の *A. amurensis* に由来すると考えられる。

(3) 染色体数  $2n=24, 40$  の品種。一茎に多数花をつける。花卉は萼片より長い。外観は  $2n=32$  の *A. amurensis* に似る。花粉の稔性は低い。日月星・撫子・金世界・福寿海・金鶏・紫雲・紅撫子・福祿寿・大鳳が属する。これらは  $2n=16$  の *A. ramosa* と  $2n=32$  の *A. amurensis* の雑種に由来すると考えられる。

□Mirella Levi D'Ancona: **Botticelli's Primavera. A botanical interpretation including astrology, alchemy and the Medici.** 213pp. 1983. Leo S. Olschki Editore, Firenze. ボッチチェリの「春」はルネッサンスの名画として名高い。しかし時の経過による素材の変質や塵埃の堆積で、制作当時の華やかさは失われていた。フィレンツェの国立修復研究所では、1966年の洪水による文化遺産被害修復の一環としてこの絵に手をつけ、1972年その成果を公表した。本書は「春」の中に描かれている多数の植物を一つ一つ同定し、それが選ばれた意義や当時のパトロン・メジチ家との関連を解釈した労作である。ある人の依頼で、私には不似合いなこういう本を見ることになった。植物の日本名を調べてほしいというのがその目的だった。

本書では部分ごとに原画と見取り図を並べ、一つ一つの花を同定している。この際フローレンス大学植物学教室ハーバリウムの協力を得、その結果40種が同定された。典型的な春の花である *Narcissus* がいないのはおもしろい。

こういうことをするに当たって基本的なことは、原画が同定に耐えるほど写実的であるかということである。絵画であり、しかも人物中心の絵だから植物の扱いはあまり慎重とは思えない。たとえば殆どの植物は根生葉をもち、茎葉は線状のものが多。あるパタンのロゼットが異なる花についていたりする。花序の形も画一的である。こういうものを同定するのは、花のみに注目して属レベルでやるとしてもなかなか大変である。

だから特色のある植物、たとえば *Helleborus*, *Tussilago*, *Muscari*, *Bellis*, *Rosa*, *Euphorbia*, *Viola*, *Iris* などは疑問の余地はないが、小形の 5 弁花となると矛盾が多く、しかもこういうものが数として多いから始末が悪い。たとえば poppy が 5 花弁で花筒や萼があったり、*myosotis* が離弁で円錐花序になっていたり、*strawberry* が 5 掌状復葉だったりする。こういうのは制作者が気がつかずに矛盾を作り出しているのを無理に同定するのだから、半分は仕方がないとして、明らかに同じ花を絵の部分によって異なった種に同定しているのは著者の責任で、どうもいただけない。どういうわけか *Crocus* と *Helleborus* を混同してしまったところもある。こういう仕事をやる人は植物学の専攻者ではなく、文科系の人なので気の毒ではあるが、“botanical” というからには分類学の専攻者を共同研究者として入れるべきだったろう。本書を提供された人の話では、別に植物学専門家の報告書があり、本書はそれに基づいている筈だというのが、それにしても矛盾が多すぎる。同定の結果によってその花言葉の意味が違ってくるので、絵の解釈自体が根本的に違ってしまうのだから、同定を軽く見るわけにはゆくまい。botanist がやれば、「写実的」といわれるこの絵の評価は変わるだろう。それとも「当時としては思いのほか写実的」ということだろうか。

このついでに書くと、我々のところへ他分野の研究者が実験材料の同定を求めることが多いが、彼等はその返事が研究の結果であることを意識していないようだ。とくに困るのは、仕事が終わってから材料の一部を持ち込まれるときである。その名前はわかるかもしれないが、彼が今までそれと「同じもの」を材料としていたかどうかは保証されないのである。「その」名前は分かったとしても、材料全体がそれだったか否かについては同定者は責任をとれない。近頃、文献引用の回数で業績を評価するというナンセンスなソフトウェアが開発されたそうで、そのせいか多数の著者による共著論文や発表がふえているように思う。中には指導教官が学生のやった仕事に共著で顔を出したり、自分の管理する機器を使わせるのに共著を要求する先生もあるというわさもきく。分類学研究者も、同定の当然の対価として共著を要求したらどうだろうか？ (金井弘夫)

□茨城新聞社(編):茨城のきのこ 287 pp. 1984. 同社, 水戸. ¥2300. “郷士の動植物を紹介するカラー自然シリーズ”(全7巻)の一つ。305種を取録, カラー写真と簡単な解説を付す。菌類の専門家の監修を受けているのは、たいへん良心的と思う。ところで、世間ではキノコを見るとすぐに「食べられますか」と問う傾向がある。一般向けのキノコ図鑑やキノコ誌の方も、とかくこのような読者の要求にひきずられるきらいがある。キノコはしばしば変異の幅が大きく、本書だけで正確に種類が決められるといったものでないだけに、キノコ料理の作り方で示して、“きのこ狩りに利用できるように”というのは、少し心配な気もする。(三浦宏一郎)